

研究通信

No. 22

1957年3月刊
村落社会研究会

事務局
大阪市住吉区
大阪市大社会学
研究室

一 つ の 要 望

御書 竹内利美

日本のムラの現地調査研究には、いくつかの流れがあるが、だいたい戦前にはそれをそれが独自の領域に立てこもつていて、おたがいの間の交流といふものはほとんどなかつたといつてよい。研究者を書者から現地へおびき出した動機も、まちまちであり、問題にする場面もちがつていた。だから、現地研究の意向も、方法も当然はらばらではあつたが、現地に残存する記録資料の探訪・発見を中心とする行き方と、直接生活現象の実際に当つて、その觀察と聞き取によつて、資料を構成する行き方といふ二つの大きな傾向がおのずからそこにみられた。遺物・遺跡の発掘・調査を中心とする考古学調査、あるいは美術史の踏査などは、だいたい前者に属するものとしてよろづた、波沢先生の主宰されたアチックミチ・ヂアム（日本民俗文化研究所）が、生活文化の動的の場面の研究の必要さを強調して、

眞具（生活要具）の採集・整理に独自の方法をひらいたのは、むしろ、後者の行き方に従うところであつた。この線はその実業史博物館の資料蒐集の上にも實かれている。もちろん、後者の行き方の先駆の一つは柳田先生のひらかれたフォクロアーワークの方法である。庶民生活の歴史の解明における記録資料の無力さを痛感されて、いわゆる正統史学の方法的限界を強調し、地方辺境の村々の伝承資料の採集・集積の上に立つて、先生は独創的な見解を次々に展開されてきた。またそのため伝承資料の学的価値とその資料分類の方法を体系的に説かれ、さらに重田立証法その他独自の研究方法も提唱された。そして、事実はほとんど全国に遍在する民俗研究家・郷土史家は、これに呼応して動き、おびただしい伝承資料を提供したし、さらには先生の指導下に専門的な民俗研究者が、組織的な全国調査を前後二回にわたっておこない、定期的な業績を発表した（山村・奥村調査）。近年刊行された「総合民俗誌」は、いわばその總決算とみてよいものであろう。しかしこうした現地資料の蒐集・構成に対する基礎的な技術については、ほとんど説かれていないようである。早川・宮本（當）両氏のような民俗探訪のベテランが示された探訪技術に関する論考もあるが、すくなくとも、科学的・基準的な方法体系といふには違ひ、いわばほとんどがカゴとナレで自慢した探集方法に従い、それも全く個人作業に終始してきた。地方研究家の

大部分も然りであり、多くは平常見聞してき
たことを注文に応じて提供するといふ範囲を
出なかつた。調査地点や調査対象（サンプル
）のえらび方も同様であつた。山村・海村両
調査は、音一の調査要領（採集手帳）にると
つき、全国に數十ヶ所の調査地点をあらかじ
め選定しておこなわれた。まさにその点でも
創始的な仕事であつたし、調査者もまた練達
者ぞろいであつた。だが、その際現地資料の
蒐集・構成について、どれだけその科学的な
操作が問題にされたか、すくなくとも、その
結果、民俗資料の蒐集・構成について、格段
の技術的更新がおこなわれたようには思はれ
ない。それは一つには、フォクロアーリストの
目標によるところであろう。日本の民俗研究
が対決しようとしたのは、むしろ正統史學の
記録資料中心の研究方法であり、その目標も
主としては民族文化の基底をなす庶民大衆の
生活様式の変遷過程の解明であつたといえる
。つまり現在の資料を扱いながら、その関心
はむしろその過去的意味の究明であり、独自
の方法によつて伝承資料を比較対照し、各類
五箇間の変遷系列を治定すること、その祖型に
できるだけ及ぼすことを目指していた。現
存の生活現象も、いわば「生活の古典」とし
ての意味において問題にされたので、いきお
い、古風な生活事象の伝存される地点と人に
の間隔ではなかつた。調査は局限されず、すくなくとも、現実の
生活機構における意味といつたものは、当面
したがつて、統計的な

いし計数的な方法が採用されたのも、サンプルに有意的な偏りの生じたのも、古者の間取を要にはほとんど終始してきたのも、当然であつたろう。その点を他の分野からかれこれ言つのは筋ちがいにちがいない。ただ日本の研究には現地資料をこねたひろく多量に提供したその業績が大きいために、それが関連する他の科学研究の分野に、そのままであまり利用に堪えないなどいうことが惜しまれるのである。なお、人文地理学、や民族経済の現地研究も、著者の系列につながるもので、それぞれ大きな足跡は残したが、これに付いたい資料蒐集の手本が、他から得られました。ことに後者ではあらかじめかなり明確に領域が定つておいた。たゞ、全国にわたる組織的調査は多く官庁の網を通じておこなわれたので、おのずからそこには限界があつた。そして専門研究者の踏査も、またその及地點にはやはり限界があつた。そして、ここに現地資料の扱い方についての技術体系が問題にされる場面はあまりなかつたようと思われる。前者の記録ないしは遺物・遺跡の資料的処理については、一應確立された資料吟味の方法体系があつたし、何よりそれらの資料は、すでに客観的なものとして存在するのであつたから、紛れもなくいい。現地資料は歴史研究のいわば、補助的資料として扱われ、近世末以後は別として、一概にそう大きな関心は払われなかつた。

こうしたいろいろな流れの中で、著書的

な見地に立つムラの研究者たる筆んだ途は、さわめて親切のものであり、著述にみられたものであつたといえる。鉱木・有資・喜多野・舟角など農村社会研究の先駆の方々の働き方は、それぞれならずしも同じではなかつたが、とにかく以上のようないろいろの現地研究方法を參照し、その実験ができるかぎり利用ましたが、充分考慮するところへ到達しがたいものがあつた。そしてさらに、民族学・花人類学の示閑社会の研究法あるいはアメリカ農村社会の研究法などの新風を導入してようやく今日「精進会折」などと通称される単位のモノグラフィックな方法をつくり上げて行つた。そこでは記録資料をかならずしも排除したわけではなく、むしろできるだけそれを利用しようとしたが、村落构造の解説に従事するには、おのずから限界があつた。そして専門研究者の踏査も、またその及地點にはやはり限界があつた。そして、ここに現地資料の扱い方についての技術体系が問題にされる場面はあまりなかつたようと思われる。前者の記録ないしは遺物・遺跡の資料的処理については、一應確立された資料吟味の方法体系があつたし、何よりそれらの資料は、すでに客観的なものとして存在するのであつたから、紛れもなくいい。現地資料は歴史研究のいわば、補助的資料として扱われ、近世末以後は別として、一概にそう大きな関心は払われなかつた。

ところで、こんなことは現地調査に関する技術体系が、すでに算譜と化するまで研究者の間にゆきわたり、しかも次々と新しい方法が紹介されてゆく今日の段階からすれば、おそらく大した意味もないかも知れない。日本農村の構造について、いくつもの説明書をひもといて、一応の感覚を得ることが可能である。しかしここに多少容易に流れる危険がないでもないと思うのはどうだろうか。たとへば仙台に来てはじめて気がつくとは、これが豈かな話であるが、いままでいわゆる「東北型」などと呼ばれた村落構造の既存構造の特徴的なダブル・アーバーを起こなうだけの地域は用意しておいたいなかつたのである。これについての解説はほとんど知られていないなかつたし、また僕に知つていても、組織的なダブル・アーバーを起こなうだけの地域は用意しておいたいなかつたのである。これに限らず、たとへば北上山城や青森の辺境をとり、これと対照する意味で岡山や名古屋辺の平地農村をとり、これまでの観察の余裕はないが、とにかく、こうした方法によるいくつかのモノグラフィックな調査資料の検討を通じて、同族団・村組・自然村等々のいわば村・群衆の基礎的概念が構成されてきたわけであるが、何といつても、基礎的資料の整理は、あたどもしいものであつたといわなければならない。

開拓山地、あるいは奥羽山地の山といつ

たものはずくなくとも、社会学的調査に関する限り、まるでプランクであるとくに仙台以南はひとい。——おそらくこれは多くの調査が東京で企劃されたせいもあるのではないと思う。いかにも東北型らしい村を探るという例の手によるもののか。そして、少々そぞろでない地点を手がけてみると、既成概念の裏北農村とは、どうもかなり色合がらがつたるもののように感じられるのである。長崎義はこの位にしたいが、とにかく調査地点一つをとらげても、また日本のムラをさつぱり割切るには、戦後の異常なまでの現地研究の造本をもつてしまつても、手おちがすぐながらずあるようである。おそらく、他の地方でも同じことであろう。何といつても日本村落の社会善的研究は、まだ年季の入れ方が浅い。こうした偏りや安直な割切り方を組織の力では正すのが、われわれの村落社会研究会の一つの使命であると思う。それには各種専門別分野の接觸・交流を活潑にする共通の場をひろげると同時に、一方では割合平常接觸の可能性のある地域的な同志の連繫を密にすることが大切だと思う。——これらで、戦後の活潑な現地調査の継続性をもふくめて、既存の歴史的調査資料の目録しらべをして、調査方法の反省をしてみたらどうであろうか。それに実際に活動単位となる各専門別あるいは地域プロック別の同志の組織化が必要と思う。ところが会の下部機構として働けるようにはこびたいと念願する。